



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

主の洗礼 C年 (2022年1月9日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 40章1—5、9—11節

第二朗読：テトスへの手紙 2章11—14節、3章4—7節

福音朗読：ルカによる福音書 3章15—16、21—22節

真人にして真神、真心なるキリスト

三つの朗読から

第一朗読の最後の一節、「主は羊飼いとて群れを養い、御腕をもって集め小羊をふとこころに抱き、その母を導いて行かれる」(11節)を心に留めましょう。聖書(旧約聖書)の伝統の中で描かれる羊飼いの姿は古代の教会の人々にとって、復活のキリストの姿と重なっていました。この世での苦役を生きる自分たちを、尽きることのない青草の茂る牧場へと導くのは復活の主以外にはいないのです。

羊飼いは羊を見つめます。羊も羊飼いを見失うことはありません。交わされたまなざしの中にあわれみと、いつくしみがあるのです。

第二朗読の真ん中ぐらにある一節、「神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました」(3章5節)は、とても印象深いです。わたしたちのおこないがわたしたちを救うものではありません。ただ、神さまのあわれみといつくしみだけが、わたしたちを救うのです。この救いは水の中で洗われ、新たに生まれ変わる洗礼によって実現していきます。こうして、キリストと深く結ばれたわたしたちはキリストのように見、語り、生きるのです。

福音朗読での言葉、「あなたはわたしの愛する子」(22節)は記憶に留めたい一節です。この神さまのひとことで、イエスさまがどなたであるかがわかります。イエスさまは何よりも神の子、愛された子なのです。

説教

かつて聖アントニオ神学校に、すばらしい先生がおられました。マウルス・ハインリッヒ神父さんです。多くの神学生を育てました。周囲の人々からは「マウロさん、マウロさん」と親しみをこめて呼ばれい

ました。残念ながら、わたしはマウロ神父さんの授業を受けただけではありません。

マウロ神父さんはドイツ人で、神学の博士でした。そして、戦前に中国に渡り、そこで神学生たちに教えました。ラテン語で神学を教えるのが当たり前の時代に、彼は初めて中国語の漢字を用いながら神学を教えたのです。そして、共産党革命が生じたとき、中国から逃れてマウロ神父さんは日本にきました。40歳を越えていたそうです。瀬田の修道院に住んで、神学教育に生涯をかけて献身しました。余談ですが、戦後、共産党支配のハンガリーから逃れてきた若き日のペトロ・ネメシェギ神父様は、日本での宣教に備えてローマで学んでいるときに、図書館の地下に眠っていたマウロ神父さんが記した神学の教科書と出会い、大きな感銘を受けたそうです。それほど、漢字を用いた教科書は画期的なものだったのです。

マウロ神父さんの授業は大変難しく、当時の神学生たちは苦勞したそうです。しかし、半世紀近く経てもマウロ神父さんのことは記憶に残っています。キリスト論という授業がありますけど、そこで「真人にして真神、真心なるキリスト」と黒板に大きく記したそうです。漢字への造詣が深いマウロ神父さんらしいエピソードです。

イエス・キリストは真の人であり、真の神です。これがイエスさまについての神秘の核心になります。しかも、真の神であり真の人だからこそ、イエスさまは真の心の持ち主です。真の心は天の御父に由来します。天の御父からイエス・キリストは偽りのない真の心をいただくのです。

今日の福音朗読で「洗礼を受けて祈っておられると」（ルカ3章21節参照）とあります。イエスさまはどんな祈りをなさったのでしょうか？ 神さまに何を問いかけ、願ったのでしょうか？ イエスさまの祈りとは父なる神との交わりでした。祈りの中でイエスさまは父なる神と深く交わるのです。イエスさまの心と天の御父の心が通いあいます。一つになるのです。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（22節）。天の御父が自ら、イエスさまがどなたであるかを示してください。イエスさまは天の御父から「愛された子」なのです。そして心がお互いに通っています。「適う」は、原文はエウドケオーだそうです。共観福音書でこの言葉が使われるときは、神さまが主語となります。「同意する、よいと考える、誰かがある人の心に適う」の意味ですが、同時に「十分に喜びを満足している」の意味にもなります。この箇所を「わたしの喜び」と訳す聖書もあります。

真の人であり、真の神であるイエス・キリストは、天の御父の喜びである真の心の持ち主なのです。そして、天から響いてくるこの宣言は、わたしたちキリスト者にも当てはまるものです。わたしたちは神から愛された者であり、わたしたち一人ひとり神さまにとっての喜びそのものなのです。愛された者として生きていけますように。